

「勉強」の感じ方

境川中 一年 NN

わたしは、毎日勉強している。学校から帰ってきた後や食事の前など、時間の空いたときは、勉強のほか、読書もする。

だから、この本の題名を見て、はつとした。「わたしは、本当に勉強が好きなのか。」という思いが頭をよぎったからだ。わたしは、勉強が、好きでもないし、嫌いでもない。そんなことを考えているうちに、この本に惹かれていった。

まず、わたしが目を見張った言葉は、「勉強の感動」だ。わたしには、勉強で「感動」したことなく、あまりない。あるとすれば、難しい数学の問題がすべて解けたときくらいだ。ましてや、教科書での「感動」なんて、味わったことはほとんどない。

しかし、筆者は、しょっちゅう感動しているという。中学生時代、数学の「三平方の定理」を知ったときがそうだ。また、大人になってからも、数学者の本を読んで、「数直線」について理解を深めたときには、「すごい発見だな」と気づくことがあったそうだ。この感動を筆者は、「発見してきた偉

人たちの感動の追体験」だと考えている。

だとすると、わたしの言う「感動」と筆者の言う「感動」とは、だいぶ違うのではないだろうか。わたしの勉強の感動は、「達成感」だ。しかし、筆者の勉強の感動は、「知識の発見」だ。そこでは偉人たちと同じ感動が味わえる。どうせ感動するのなら、わたしも偉人たちと同じ感動を味わいたい。そのため、わたしは教科書を自分で解説し、偉人たちの知的興奮を体験しようと思う。

ところで、勉強の話をしていると、よくこんなことが耳に入ってくる。「勉強なんかやっついて、将来役に立つのか」という言葉だ。わたしは、役に立つと思う。というより、実際に今、役に立っているはずだ。物事を論理的に考えられるし、人と話すとき、言葉を口から滑るように発して、会話が成り立っているのではないか。

これについて筆者は、数学を最も関連づけさせて考えていた。まず、数学を論理的に解ける人と解けない人には、話し方に大きな差があるという。

数学を論理的に解ける人は、話が続き、盛り上げることができる。一方、解けない人は、まったく筋違いのストーリーを展開し、話が通じない。つまり、話を通じないから、数学をやっていない人には、仕事させられないということだ。

だから、わたしは、人とうまくコミニケーションを取るには、数学は絶対やらなくてはならないと思う。数学は、勉強したことを直接は使われないが、現在や将来のためになくてはならない、必須科目であることを改めて実感した。

そして、必須科目には、試験がある。筆者はその試験に関して、「試験嫌い自分の力を知るのが怖い人」としている。さらに続けて、「自己を客観視する能力」という言葉があり、わたしはそこに目を奪われた。

わたしは、筆者が言いたいことが分かった気がした。試験は、人と自分を数値ではつきりと比べる。試験嫌いの人は、自分が人よりも劣っていることを認めたくない。つまり、試験嫌いの人というのは、「自己を客観視する能力」が極めて少ないのだと感じた。

筆者は、「試験を通じて、認めにくい現実に向き合う心の強さを鍛える。

しかし、現実に向き合う力のない人は、実際はまず仕事ができない」と述べている。

わたしも、塾の模擬試験を受けたことがある。正確な数値を見れば、どれだけ自分より上の人がいるかが分かり、認めたくないと思うこともある。しかし、それを認め、次の試験に向けてがんばっていく。こんな当たり前のことで、知らない間に「認めにくい現実に向き合う心の強さを鍛え」ていたのだ。

筆者は、学ぶことの大切さと共に、楽しさも教えてくれた。また、いかに勉強が将来の仕事へと導いてくれるかが、頭にしみわたるように理解できた。わたしは、筆者に出会うまで、勉強が好きでも嫌いでもなく、やらなければならぬものと感じていた。しかし、この本の中で筆者と対話をしたことにより、勉強を少しでも好きになり、「感動」できる勉強に変えようと思った。わたしは、大人になっても勉強したい。そして、立派な大人になったとき、自分以外の人に向けて、胸を張って言えるようにしたい。「勉強は、楽しいです。」

